アジア・アフリカ地域研究 第 19-1 号　2019 年 9 月
Asian and African Area Studies, 19 (1): 82–105, 2019

フィールドワーク便り

フォーを食べる夫に注意？

古　橋　牧　子*

ベトナムには“Chán cơm thèm phở”[1]という四字熟語がある．直訳すると，白いご飯に飽きてフォー（米粉で作られた平たい麺料理：写真 1）を食べたくなるという意味であるが，実は，妻に飽きて他の女性を求める男性の心情を表している．あるサイトでは，白いご飯を妻に，フォーを妻以外の女性に置き換えることとして次のような解説までなされていた．白いご飯はおかずがないと食べられないが，フォーは温かく良い香りがしてお腹がいっぱいになっても食べたくなる［Vn Express 2013］．まったくどこの地域でも，誠実で一途な男性というのは純愛ドラマの世界にしかいないのかと呆れるが，ひとまず冷静に読み返してみよう．この熟語では，ベトナムの家庭で白いご飯が日常的に食べられるということが前提となっている．日本では，ベトナム料理といえばフォーが真っ先に頭に浮かぶという人が多数派だろう．しかしベトナムでは，フォーを食べることが浮気をすることの隠喩として用いられることからも，フォーは家庭で食べられる料理ではなく，家の外で食べる料理だとわかる．さらにいえば，南北に細長いベトナムは，各地域によって食文化が大きく異なり，フォーはベトナム北部の料理であるといわれている．私の調査地であるベトナム南部メコンデルタでは，フーティウという米粉で作られた細く角ばった麺がよく食べられている．ベトナム料理において米粉で作られた麺はほかにも多数あり，中でも断面が円形のブンという麺は，北部でも南部でも日常的によく食べられている．私が，ベトナム南部メコンデルタのカントー市に滞在した 2018 年 6 月 5 日～7 月 2 日の約 1ヵ月間，ホームステイ先の食卓に

写真 1　2019 年 1 月 31 日ホーチミン市の食堂で食べた朝食のフォー

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1）メコンデルタ方言では，Ngán cơm thèm phở と記される（メコンデルタ，ビンロン省出身の留学生 M 氏私信）．

フォーがあがることは一度もなかった．フーティウも家で食べる機会はなく，家で食べた米粉麺は，ブンのみだった．

ベトナム南部メコンデルタの家庭料理

それでは，ベトナムの家庭では日常的にどのような物が食べられているのかについて紹介してみたい．ベトナムの家庭料理では，白米，肉か魚の料理，野菜料理，スープが並ぶことが一般的であると，ホームステイ先の父親が誇らしげに教えてくれた．下記に挙げる食事メニューは，私が実際にホームステイ先でいただいた夕食である．

6月7日：白米，淡水魚の後引き煮，茹でたオクラ，カボチャと豚挽肉とネギのスープ（写真2）
6月8日：白米，淡水魚のウコン煮，茹でたササゲとサツマイモの葉，海藻と豆腐と挽肉のスープ
6月9日：白米，焼魚，淡水魚のウコン煮，炒めたササゲと挽肉，ゴーヤの肉詰めスープ

これらの料理で使われた食材のうち，淡水魚が海水魚に，ササゲがインゲンマメに，そしてサツマイモの葉がホウレンソウに代わったなら，日本の家庭料理であると紹介されても違和感がない．私は，ホームステイでの生活を経て，ベトナムと日本の家庭料理は似ていると感じた．そのため，ホームステイ先の家庭料理で私の口に合わなかったものはない．飽きることも日本食が恋しくなることもなかった．ベトナムの人々が家庭で食べている食事について，これまで抱いてきたイメージが変わったという人もいるかもしれない．現に私も，ベトナムでホームステイをするまでは，ベトナム料理といえばフォー，バインミー（フランスパンのサンドイッチ），生春巻き…を思い浮かべていたひとりだったのだから．

写真2　2018年6月7日の夕飯

とはいえ，ヌックマムと呼ばれる魚醤による味付けは，日本料理では味わうことができないベトナム料理の特徴である．また，時に汁物としてキャベツを茹でた後の茹で汁がそのまま出されることもあり，栄養価の高い素材を無駄にしない考えに基づいているのだろうと感心させられる．

茶碗ひとつ

ここで，ベトナム料理を食べるときの作法についても述べておきたい．各料理は大皿に盛りつけられ各々が直箸でつつく．料理のほかに食卓に並べられるのは，人数分の茶碗と箸と蓮華のみである．日本の味噌汁のように，スープを別のお椀に人数分よそうことはしない．茶碗に白米を盛り，おかずをのせて

食べたり，スープを白米の上からかけて食べる．このように，ベトナムではおかずもスープも白米とともに食べるものであるため，取り皿は使わないのである．1 回の食事で何杯も白米をおかわりする姿はベトナムの家庭料理の特徴だろう．1 人あたりの 1 日の米消費量が，日本は 119 g で世界第 50 位であるのに対し，ベトナムは 398 g で世界第 4 位と日本の 3 倍以上であるという結果にも頷ける［トリップアドバイザー 2015］．

手間暇のかかる家庭料理

ベトナムにおける一般的な昼食のスタイルは日本と異なっている．その違いを，ホームステイ先の長女の 1 日のスケジュールからみてみる．長女は家からバイクで 10 分程度の場所にある銀行に勤めている．たいていの日は，朝食を家で食べ，朝 7 時に自宅から職場へ出発する．朝食を家で食べる時は白米とおかずを，たまに外で食べる時は，バインミー，鶏肉のおこわ，小麦の麺，肉まん，焼売，ワンタンなどを食べる．出勤した長女は，午前 11 時に家に帰ってくる．昼食を食べ，休息するためである．長女は帰宅早々に母親と一緒に昼食の支度をする．出来上がる頃，「お父さん，もうすぐご飯よー」と大きな声で父親を呼ぶ．基本的に，台所で調理をするのは女性なのだ．父親は食卓や食器を準備する．家族そろって昼食を食べた後は，ハンモックに揺られながらテレビを見て各々休憩している．大都市のホーチミン市では，このように昼食を家でとる習慣が失われつつあるという話を聞くが，メコンデルタのカントー市では，社会人も学生も家に帰ってきて昼食をとるのが現在も一般的であるという．午後 1 時頃，再び長女は職場へ向かう．夕方 5 時頃，仕事を終え帰宅するが，休む間もなく夕飯の支度をする．たいていの夕食は，昼食と同じメニューを温め直したり，調理し直したものである．つまり，1 日の食事の調理は昼休みにしてしまうのだ．昼食の支度について簡単に書いてしまったが，野菜などの食材は，スーパーマーケットで売られているような土が綺麗に落とされたものではなく，市場で販売されている土が付いたままの野菜である．そのため，正確に時間を測ったわけではないが，野菜を洗う作業にもかなりの時間を費やしていた．現代の日本ではスーパーマーケットで食材を購入する家庭がほとんどだろう．少しでも食事の準備に費やす時間を減らす目的で，綺麗に洗われた野菜だけでなく混ぜ合わせた調味料や冷凍食品等を利用するのが当たり前になっている．私が滞在していたカントー市はメコンデルタで一番大きな都市であり，スーパーマーケットの利用も普及し冷凍食品や惣菜等も販売されている．しかし，日常的に時短調理で手軽に食事を済ませてしまうという家庭はそれほど多くないと感じる．夫婦が共働きの家庭は，炊事をしてくれる家政婦を雇うこともしばしばである．ベトナム料理は，味付けのたれや付け合わせの香草類までその組み合わせが細かく決められており，繊細だと感じる．普段，日本で時短調理グッズに頼っている私は，ベトナムの家庭料理がいかに手間暇かけて作られているのかを実感させられた．これでは，毎日の食事

を作る妻の方から夫に，たまには外でフォーを食べてきて，と言いたくなるかもしれない．

引 用 文 献

トリップアドバイザー．2015.「世界で一番おコメを食べているのはどこの国？」〈https://tg.tripadvisor.jp/news/graphic/eatrice/〉（2019年6月18日）

Vn Express. 2013. 11 lý do vui đàn ông chán ‘cơm’ thèm ‘phở’.〈https://vnexpress.net/doi-song/11-ly-do-vui-dan-ong-chan-com-them-pho-2896837.html〉（2019年5月21日）

現代インドにおけるダリト女性と教育環境

本　山　可南子 *

「わぁ．新しい服買ったの？クルタも良いけど，そういう洋服も似合うね！」

「シーッ！こういう服はお兄さん・お姉さんに咎められるから，今はまだ秘密にしてて！」

「え？でも，近所の友だちは普通に着てるよね．あなたが着ると家族に怒られるってこと？」

「そう．なんというか…ビハールの問題なの」

これは，筆者がインドのビハール州でフィールドワークをしていた時の，現地の女の子とのやり取りです．約3ヵ月，ホームステイをしていた家の人々は，カースト制度において最下層に位置づけられているダリト（かつての不可触民）といわれる人々です．彼女もホームステイ先の家族の一員で，当時20歳にして毎日家事と勉強で忙しそうにしていました．そんな彼女がカラフルなクルタとスパッツを合わせるスタイルから，ジーンズと落ち着いた紺色のノースリーブに着替えており，ガラッと印象が変わって素敵だねと伝えたところ先ほどのように返されたのです．

周りの人から咎められないよう，秘密にしておかなければならない新しい洋服，そこには一体どのような“ビハールの問題”が隠されているのでしょうか．

よくよく彼女の話を聞いてみると，結婚適齢期にある身でノースリーブを着てジーンズを履くと男性の目を引く行為と取られるので，特別な理由がないとこういった洋服を着るのは控えないといけない，ということでした．インドの伝統的な服装であるサリーや，普段着に着易いクルタといった格好をすることが外聞も良く，自分の身の安全を守るうえでも都合が良い，ということのようです．

インドの服ではなく洋服を着ることに対し

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

て，家族全員に咎められるのかというとそういう訳ではないそうです．意外なことに，父親代わりの伯父は特に否定的なことは言わず，彼女と同世代の従兄たちの方がそういった服装に苦い顔をして注意をする，とのことでした．

ホームステイ先で歳が近く同性ということもあり彼女と一緒に過ごす時間もたくさんあったのですが，何度かこの「ビハールの問題」にぶつかることがありました．

さらに別の日，キッチンで彼女と夕飯の準備をしていると彼女の携帯電話に着信が入りました．いつもどおりすぐに電話を取るかと思いきや，近くに誰かほかの家族のメンバーがいないか念入りに確認してから掛けなおしていたので，

「どうしてさっき，電話を取る時にあんなに注意深く周りを見渡していたの？」

と聞いてみると，

「相手は親戚の男の子で，彼と結婚したいと思ってるけど，お父さん（彼女の伯父）は彼をあまり良く思っていないから秘密なの．それに，大学を卒業する前に誰かと結婚させられるかもしれないから不安なんだ」

と返ってきました．

思いがけず，彼女の人生が大きく変わるような事情を聞いてしまい驚きましたが，インドの，特に農村部においては女性が 20 歳前後でお見合い結婚をするのはごく普通のことだと教えられ，彼女らの希望が叶わずに話が進む可能性も大きくある，ということを改めて実感しました．

さらに彼女は，

「もし彼と結婚出来たとしても，相手の両親は私が大学へ行くことを良く思っていないから，今以上に家事の手伝いをたくさんさせられることになって勉強が出来なくなりそう．でもあと 2 年は自由が欲しいな」

と続けました．

彼女の話を聞くと，人生の局面において自分で選択できる状況を作るためには，勉強することが大切だ，と考えていることがうかがえました．彼女は小学校入学前，実家がある田舎の農村地域からひとりで伯父の家に預けられ，それ以降の約 10 年間この家で過ごしているという背景があり，人生の転機において教育が肝になっていることを，身をもって経験しているともいえます．

こうした実例から明らかなように，インドにおいて教育は人生の選択肢を増やす手段となっていることがわかります．私は，ダリトといわれるカースト制度の最下層に位置づけられてきた人々が，どのような教育環境にあり，どのように教育の経験を積んでいるのか，そしてそれが個人の人生にどう作用しているのか，という点について研究を行なっています．

ここでインドの学校制度について，簡単に説明します．私が調査を行なっているビハール州においては，義務教育として小学校（5 年間）・中学校（3 年間）に通いますが，これらの学校の運営主体はさまざまです．日本のように公立学校や学費の高額な私立学校だけでなく，NGO 団体や宗教団体が運営主体となり安価もしくは無償で学校が運営されています．

日本と大きく異なるのは，政府が運営する公立学校が機能していないことが挙げられます．特に農村地域や山間部などでは，配置されている学校の数が少ないことや，先生に課された授業外の事務的な業務が多いことなどが背景にあり，授業時間になっても先生が教室に現れなかったり，出欠のみ取られて授業が放棄される，あるいは教科書を読み上げるのみであったりと，公立学校の質が低いことが問題となっています．

もちろん，すべての公立学校がこのような機能不全に陥っているわけではありませんが，無償で義務教育を受けられる公的な教育機関だからといって，安定した教育が受けられるとは限りません．

こうした状況に大きく左右されるのは，貧しい家庭に生まれた子どもです．無償で学校教育を受けられたり，学校によってはお昼の給食を食べられたり，ということが就学・通学・進学の利点となっている彼らにとって，公立学校でそれが叶わなければ，家の手伝いや働き手に出されることになることも多々あります．

さらに，経済的に厳しい家庭であること以外にも教育を受けることが困難な状況にある人々がいます．それは，女性であるということ，またカーストにおける身分が低いということです．

これまでのインドの歴史において，無償で義務教育を受けることは全ての人にとって容易ではありませんでした．イギリスの植民地下ではエリート官僚育成という目的のもと，公的な教育を受けられるのは一部の上位カーストの男性だけでした．しかし，1947 年の印パ分離独立から現在まで徐々に，個人の属性，特にカーストや性別によって教育が受けられない状況が是正されてきました．それでも，今なおカーストが低く，女子に生まれることによって，教育を受けることが叶わない，あるいは望まれていない状況は依然としてあります．

冒頭で紹介した彼女は，家事に追われ，進級試験につまずきながらも，時間が許す限り，学校教育における知識や経験，あるいは自由な時間を享受したいと考えています．親族からの結婚のプレッシャーも含め，社会的な状況が厳しい中，教育を受ける権利を保持すべく立ち回ってきました．

しかし，注目すべきは，こうした子どもに対して，NGO 団体・宗教団体の運営する学校が教育支援を活発に行なっていることが挙げられます．このような学校は公立学校や私立学校と同等もしくはそれ以上の質を保ちながら教育支援を行なっているため，通学先の学校として積極的に選択されている，という実態があります．

私の調査地であるビハール州のブッダガヤは，ブッダが悟りを開いた地であることから，仏教徒の聖地として有名です．さまざまな宗教団体が活動をしたり，インド国内外から観光客が集まったりしています．さらに，ビハール州はインド国内において最も貧しい州であることから，教育分野に限らず何らかの形での支援を行なう NGO 団体が多く参入しています．

こうした理由から，NGO 団体や宗教団体

写真 1　NGO による教育支援の一例
規模は小さいが平日は 30 名程が集まる

写真 2　学費が高額で大規模な私立学校
保護者（中 2 人は生徒）と担任の面談

が運営主体となっている学校は，公立学校や高額な私立学校よりも多く見受けられました．

私のホームステイ先の付近にも，NGO 学校に通学する子どもがたくさんおり，その中でも密に支援を行なう学校に通学していた女の子の例を紹介したいと思います．

彼女は家から徒歩で 30 分ほどの場所にある NGO 学校に通学しており，朝 7 時 30 分から昼の 13 時まで 5 教科と副教科の授業のほか，朝 30 分間のお祈りと軽食の時間を過ごします．

学校には幼稚園から中学校までの生徒がおよそ 300 名集まり，それぞれの学費や教科書，制服，その他学校に関わる教育費も全て学校に対する支援で賄われています．校舎もコンクリートの 2 階建てで，学年・クラスごとに教室があり，PC 教室やお手洗い，水回りも，写真 2 の私立学校と同様，清潔に整備されています．

このような手厚い教育支援を受けるためにどうすれば入学できるのか，校長へインタビューを行ないました．

すると，この学校に入学する子どもは，ある基準に沿って選ばれていることが明らかになりました．

第一に，経済的に貧しいこと，第二に，カーストが低いこと，そして最後に父親や母親といった保護者の有無や彼らの状況を加味して，どの家庭の子どもが優先して学校に入学するべきか，検討するとのことでした．

毎年，定員を大幅に超えて入学希望者が来るため，一軒ずつ訪問しながら家庭状況の調査や保護者への面接を，時間をかけて行なうそうです．

確かに，近所に住むその彼女には父親がおらず，金銭的にも余裕がない家庭に生まれ育っていた状況がありました．

同時に，付近の公立学校のうち彼女の家から最も近い学校は近年開校されていなかったことを考えると，彼女が家の手伝いや働きに出ずに，通学して勉強をできる環境にあるのは，少なからずこうした私的な団体による教育支援の存在があるからだと思います．

以上のように，公的教育の恩恵を受けがた

い人々のもとに私的な教育支援が行き渡っている状況を目の当たりにし，人々に選択の自由がある状況の重要性を改めて認識しました．

すなわち，それぞれの集団帰属がどのようなものであっても，経済的状況に余裕がなくとも，無償で義務教育を受けたいと思った時に，全員に学校の門戸が開かれている状況を生み出す必要があります．

こうしたことから，これまで虐げられてきた歴史をもつダリトの人々に着目し，いかに彼らの生活と教育の機会が程遠かったのかをひもとき，どのような教育の経験によって彼らの置かれた状況が改善されていくのか，という過程をこれからの研究で詳細に明らかにしていきたいと思います．

ウガンダでITがつくるバイクタクシーの安心

大　谷　琢　磨*

ウガンダで感じた夜間移動の不安と不便さ

2015年9月の夜10時すぎ，わたしは，ウガンダの首都カンパラにある中華レストランで，先輩の研究者たちと食事を終え，帰路につこうとしていた．レストランを一歩出ると辺りは暗く，車の通行がない．見当たるのは，50 mほど離れた交差点で客待ちをしている3台ほどのバイクタクシーだけだった．当時，わたしはカンパラに知り合いがおらず，彼らを移動手段として使う以外に方法はなかった．しかし，相手は得体の知れない運転手であり，バイクタクシー運転手による強盗や連れ去りのうわさを聞いたこともあり，安心はできなかった．運転手を不快にさせないよう，運賃交渉はせず，言いなりのまま，わたしはバイクにまたがった．バイクタクシーに乗っているあいだ，運転手の名前や住所などといった情報を聞き出し，何かあった場合には，その情報を警察に届け出ようという心づもりだった．無事に滞在先に帰着したあとも，先輩たちとショートメールでお互いに無事を確認しあった．2015年当時，見ず知らずのバイクタクシー運転手に身をゆだねるのは，かなりの緊張感をともなった．

人々に親しまれた交通手段―ボダボダ

バイクタクシーとは，自動二輪車を利用した交通機関である（写真1）．ウガンダではバスや鉄道といった公共交通機関が未整備で，人々が気軽に利用できるのは，乗り合い

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

写真 1　ボダボダ．客を乗せるバイクタクシー

タクシーかバイクタクシーしかない．乗り合いタクシーは都市部の幹線道路で操業しているが，渋滞の影響を受けやすい．それに対して，バイクタクシーは大通りから外れた場所や農村にも移動でき，車のあいだをすり抜けて渋滞のなかを移動することもできる．また，ウガンダでは雇用が不足しており，バイクタクシーは，高度なスキルをもたない若者たちの重要な現金獲得源になっている．このように，ウガンダにおいてバイクタクシーは，需要と供給の両方が高く，ウガンダ全土に普及している．現地では，*boda boda*（以下，バイクタクシーはボダボダと記載）と呼ばれて親しまれている．

ボダボダに関する否定的な側面

ボダボダは需要と供給の高さからウガンダで急増しているが，人々からは，ネガティブな意見も聞こえてくる．たとえば，ウガンダの警察官が「ボダボダ運転手は窃盗をはたらく」，「犯罪者の隠れ蓑になっている」という反社会的な存在だと語るのを聞いたことがある．また，ボダボダ運転手をおもな客としているチャパティ屋の主人は，ボダボダは「命を顧みない荒い運転をし，人をひき殺す」と語った．2018 年にわたしの調査地であるマサカの街なかで，車道を渡っていると，後ろから来たボダボダのハンドルに左腕を当てられ，持っていた砂糖を道にぶちまけてしまったことがある．そのとき，わたしは，考え事をしていてボダボダに気付かなかったのだが，わたしにぶつかったボダボダの運転手は後ろを振りむくこともなく，走り去った．また，ボダボダに乗って渋滞のなかを走行していたときには，車と車の非常に狭いあいだをすり抜けて走行していたため，わたしの膝が車に当たることもあった（写真 2）．このほかにも，運転手が相場よりも高い運賃を吹っかけてきたり，初めに目的地への行き方を知っていると言っておきながら，実際には目的地までの道を知らなかったりすることもあり，ボダボダ運転手とのトラブルは日常茶飯事だった．そのため，大声をあげて運転手と

写真 2　交通渋滞をすり抜けるボダボダ

口論することも幾度となくあった．だからこそ，このようなトラブルが起こるリスクを軽減させるために，わたしは，信頼できる運転手を見つけようと努力してきた．一度利用して，値段交渉や運転の丁寧さ，支払いどきの対応から，大丈夫だと判断した運転手には，それ以後にも繰り返し利用するなどして，信頼できる運転手をひとりでも多く確保しようと努めた．信頼できると判断した運転手には，遠方への移動や，夜間の移動どきに送迎をお願いした．ボダボダの利用でトラブルを避けるためには，細心の注意が必要であり，ときに不便さがともなった．

新たな IT サービスの登場

2016 年に再びウガンダを訪れると，このようなボダボダ利用の不便さに，劇的な変化がみられた．スマートフォンでボダボダを呼ぶアプリが登場したのである．これは，「SafeBoda」というライドシェアのアプリで，同名の企業により提供されている．ライドシェアとは，自動車の運転者と，移動手段として自動車に乗りたい利用者とを結びつけるサービスの総称である．欧米や日本においても，「Uber」はライドシェアを提供する企業として有名である．Uber は基本的に自動車のライドシェアを提供しているが，SafeBoda は，バイクタクシーのライドシェアを提供している．

わたしがこのアプリを初めて利用したのは，2016 年 7 月カンパラで，友人と韓国料理屋に行ったときのことだった．そのときは 22 時すぎに店を出て，試しにこのアプリをスマートフォンで利用した．自分の名前や電話番号などをアプリに登録し，アプリ上の地図で乗車地点と降車地点を入力すれば，GPS で周辺にいる運転手とマッチングして呼ぶことができる（写真 3）．使い方がとても簡単で，まずこのことに驚いた．そして，実際にボダボダが迎えに来ると，さらに衝撃を覚えた．到着した運転手が，SafeBoda のシンボルカラーである蛍光オレンジのジャケットとヘルメットを着用し，乗客用のヘルメットまで持っていたのである（写真 4）．通常，ボダボダ運転手は警察の前でのみヘルメットをかぶり，運転手から乗客がヘルメットの着用を求められることもない．そのため，安全のためにマイ・ヘルメットを持ち歩く外国人もおり，わたしも日本からわざわざヘルメットを持っていった．

運転手が着用しているジャケットとヘルメットには，運転手の名前とともに，SafeBoda

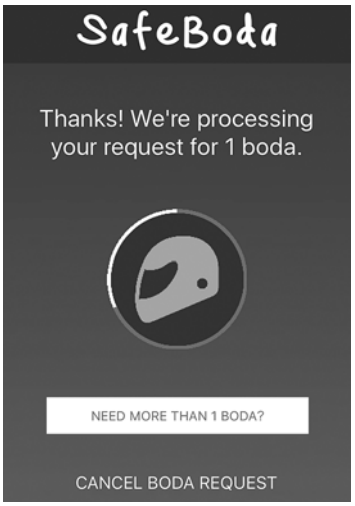

写真 3　SafeBoda アプリによる運転手の呼び出し画面

写真 4　オレンジ色のジャケットを着る SafeBoda 運転手．客用のヘルメットが準備されている

から与えられた ID ナンバーが記入されていた．運転手たちは SafeBoda に National ID（国民カード）などの個人情報を登録しており，何か問題が発生しても，ジャケットに記入された番号や名前を会社に伝えれば，クレームを入れることができる．たとえ初対面であっても，個人情報が管理されているので，SafeBoda の運転手を特定し，その所在を追跡することは可能である．ほんの 1 年ほどのあいだで，見ず知らずのボダボダ運転手に身をゆだねるときにもっていた不安を抱かずに済むようになった．目的地に到着すると，運転手のスマートフォンに運賃が表示され，その金額を支払うだけで清算が完了した．また，支払いは現金だけでなく，事前に登録したクレジットカードやモバイルマネーの利用も可能だった．

乗客は支払いを終えたあと，アプリで運転手を 5 段階で評価することができる．アプリ上で，運転手を利用する前に評価が可視化され，乗客はその評価を把握できるようになった．このように，SafeBoda は，ボダボダを利用すると避けられない値段交渉の煩わしさも，ヘルメットをかぶらずにバイクに乗る不安も，そして，知らない運転手の素行に対する恐れも，すべて解消してくれたのである．スマートフォンと SafeBoda というアプリ，そしてこの IT に連携するボダボダ運転手が，乗客の安全と安心を提供するようになったのである．カンパラの街なかを走るボダボダに乗りながら，これこそ IT が社会変革をうながすイノベーションではないかと思い，うれしさから，移動中に運転手に対していろいろと尋ねた．

SafeBoda で広がった行動範囲

これ以後，わたしの行動範囲は広がり，より自由にカンパラを動き回るようになった．とくにわたしがカンパラにいるときの夕食のバラエティーは劇的に広がった．SafeBoda が登場する前には，ホテル近くの屋台で売られているチャパティやミルクチャイで簡単に済ませていたが，中華料理やケバブ，ピザなどを食べに出かけるようになった．

このように SafeBoda は，利用客の行動範囲に大きな変化をもたらした可能性がある．といっても，現時点では，このアプリを主に利用しているのは富裕層や外国人である．とくに，自家用車を持たない外国人にとって，

信頼できるボダボダ運転手を確保することは，移動の自由度を高めるうえで重要である．

そして，2017 年 9 月にふたたびウガンダに渡航したとき，SafeBoda 以外に，カンパラには新たに 2 社が進出しており，合計 3 社によってボダボダのライドシェアをめぐる競争が激しくなっていた．カンパラの幹線道路では，ライドシェア企業のジャケットを着た運転手が何人も走っている．しかし，現状はまだ，カンパラ市内であっても，時間帯や場所によっては，アプリで周辺を探してもボダボダが見つからないこともあり，このサービスは発展途上だといえる．

今，ウガンダにおけるスマートフォンの普及率は 20%ほどであり，日本やアメリカの約 70%と比べると大きく下回っている．しかし，ちかい将来，ウガンダにおけるスマートフォン普及率はさらに上昇するだろうと推測される．そうなれば，多くの人が，スマートフォンのアプリを利用してボダボダを呼ぶようになるだろう．このとき，人やモノの流動性はさらに高くなり，ボダボダ間のサービスや価格の競争も激化する可能性がある．スマートフォンや IT がどんな未来をつくっていくのだろうか，カンパラの雑踏のなかで，さまざまな想像がふくらんでいく．

介助現場のフィールドワークからみる
脳性麻痺児を対象とした排泄介助の工夫

善 積 実 希 *

「排泄」の語りにくさ

わたしたちが生活をしていくうえで，排尿や排便といった排泄行為は身体の健康のバロメータである．しかしながら，日常生活では「排泄」という言葉を口にすることすら少なく，その語りにくさがあるようにもおもわれる．介助の現場では排泄という言葉を用いることや，排泄について考えることは，日常的であり，介助を受ける人の健康について考えるうえでとても重要なことである．たとえば，障害児の自立を考えたとき，排泄に関していえば排泄自立がある．彼らにとって排泄自立は，彼らが排泄できるようになるだけではなく，大きな自信をもって自由に行動することを可能にし，発達の可能性を引き出すといわれており［桑野 1988: 107］，排泄について考えることが欠かせない．

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

身体の生理現象について考える日々

わたしのフィールドワークはこうした人の生理現象について考えることから成り立っている．わたしはケニア共和国のサンブル県（Samburu County）にある障害をもつ子どもを支援する施設で，ボランティア（介助者）として子どもの介助に携わりながら，介助現場で繰り広げられるケアの様相について観察を続けてきた．当施設では年齢[1]や性別，障害の種類や程度もさまざまな障害者が寝食を共にしている．そのため，子どもたちが必要とする介助の内容や程度は一様ではなく，彼らのうち排泄介助を必要としていたのは脳性麻痺児であった．

脳性麻痺児の身体の特徴として，不随意運動や筋肉の硬直，言語表出の困難さなどがあり，排泄に問題を抱える脳性麻痺児は多いといわれている［山川ほか 1993: 815］．介助者の体力的な負担もひとつの課題として挙げられ，たとえば，ザンビア共和国でおこなわれた調査では，上記した脳性麻痺児の身体の特徴のために，おもに介助を担っている母親が介助に伴う身体的な苦痛を経験する傾向にあると報告されている［Singogo *et al.* 2015］．また，介助者には物理的な困難により体力的な負担がかかるばかりではなく，脳性麻痺児にとって言語表出が難しい場合があることから，介助者が子どもの便意のサインを把握できないという問題もある［山川ほか 1993: 816］．脳性麻痺児に対する排泄介助に着目した研究は，介助者の負担や脳性麻痺児の生活におけるストレスの軽減のための方策を考える一助になるとおもわれることから，わたしは脳性麻痺児への排泄介助に着目し，介助者の視点から介助するうえでの困難について考察するために，フィールドワークを実施してきた．

スタッフが危機感をもっていた脳性麻痺児に対する不安定な排泄介助状態

わたしが 2018 年に当施設でフィールドワークを実施したのは，調査対象地域において降雨が断続的に長く続く雨季であった．そのため，朝に洗濯して日中のあいだ干しておいた衣類が夕方になっても乾かないことがしばしばで，子どもたちが着替えを必要とするときに乾いた衣類がないことが何度もあった．当時，施設にはおむつの在庫がなく，おむつを必要とする脳性麻痺児[2]もおむつではなく布製の下着を身に付けていた．そのため，彼らが排泄を終えるたびに下着の着替えが必要であったことから，彼らが着替えをおこなう頻度は他の子どもたちと比べてとても多かった．こうした状況下で介助をおこなっていたスタッフたちも，脳性麻痺児が必要とする着替えをできず，望ましい介助ができていない

1）当施設では障害をもつ子どもを支援の対象としているが，成人の障害者も生活している．彼らは幼少期から施設で支援を受けており，専門学校や大学に通いながら施設で生活する者や仕事をしながら施設で生活する者がいる．

2）調査当時，当施設では 82 人の子どもが生活していたが，おむつを必要としていたのは脳性麻痺児（10 人）のみであった．

状態に危機感をもっていた．このような不安定な排泄介助状態が続いていたある日，脳性麻痺児の介助を担当しているスタッフのメアリー[3]がポータブルトイレの製作をはじめた．

ひらめきからはじまった排泄介助の工夫
―ポータブルトイレを自分で作る

①　その場にあるものを活用する

当施設は国内と国外から個人や団体を問わず支援を受けており，机やいす，リハビリ用品などの物品が寄付されている．幼児用のプラスチック製のポータブルトイレ（おまる）（写真 1）もあり，自ら姿勢を維持できる子どもに対してはこれらを使用して排泄介助がおこなわれることもあった．しかし，姿勢維持に手助けを必要とする脳性麻痺児のためのポータブルトイレはなく，幼児用のポータブルトイレを用いて彼らの排泄介助をすることはできなかった．そこでメアリーは，施設にもともとあった木製のいす（写真 2）を改良して脳性麻痺児のポータブルトイレを製作す

写真 1　幼児用のポータブルトイレ

写真 2　木製のいすと机

るという案を思いついた．

当時，施設の一部が工事中であったために施設には複数の大工が出入りしていた．メアリーはいすを改良してポータブルトイレを製作するアイディアをもっていたが，そのための技術はなく，道具も持ち合わせていなかった．そこで，たまたま施設に仕事をしに来ていた大工に頼みこんでいすに穴を開けてもらうことにした．メアリーとその大工は顔見知りということもあり，この仕事は無償だった．そして，彼女は施設に隣接する国際 NGO の事務所から使用済みペットボトルを無償で譲り受け，排泄物を受けるための容器[4]を作成した（写真 3）．

②　子どもの反応をみながらポータブルトイレを改良する

メアリーは新しく作ったポータブルトイレを使って脳性麻痺児の排泄介助をし，子ども

3）本稿で扱う人物名はすべて仮名である．
4）20 L の飲料水が入っていたプラスチック容器の上部を切り落とし，下部のみを木製のいすの穴の下に置くことで，排泄物を受ける仕組みとなっている．

写真 3　ポータブルトイレに改良された木製のいすと排泄物を受けるための容器

たちの反応をみながらそれらを改良していった．この背景には，日ごろの脳性麻痺児の排泄介助で，メアリーが脳性麻痺児の反応を観察していたことが重要な点として挙げられる．彼女は，介助に関する知識や技術習得の講習を受けたことはない．けれども，日ごろの脳性麻痺児への介助実践から個々の子どもの特徴や反応をよく理解し，新しいポータブルトイレを使ったことに対する子どもたちの反応をしっかりと把握していたのである．たとえば，パトリック（男性，年齢不詳）は新しいポータブルトイレの使用中に「泣く」「顔をしかめる」という反応をみせ，姿勢を保てず前後左右に倒れてしまっていた．また，メアリーがアニー（女性，年齢不詳）の清拭をしているときに彼女の臀部に新しいポータブルトイレの座面と擦れてできたとおもわれる傷を見つけた．

メアリーはこうした子どもたちの反応や体の状態をみて，パトリックのように新しいポータブルトイレに座った際に姿勢を維持することができない子どものために，施設の各部屋から集めてきたクッションを使って彼らの体を支える工夫をした．そして，アニーのようにポータブルトイレの部位が体に擦れて傷ができてしまっていた子どものために，施設にあった防水シートを新しいポータブルトイレの座面に貼り付けるという案を思いついた．彼女は施設で生活しているジェイソン（男性，20 代，車椅子を使用する）に防水シートの貼り付け作業を頼んだ．彼はビーズの装飾品を作成して販売するほど器用で裁縫道具も保有していた．シートを貼り付けるための材料と道具が必要だと気づいた彼は，その場に居合わせたウィリアム（男性，20 代，聴覚障害）に施設内の工事中の部屋からねじと金づちを探してくるように頼み，2 人で貼り付け作業に取り掛かった．彼らのこうした取り組みを経て，防水シートが貼り付けられたポータブルトイレが完成した．

写真 4　防水シートが貼り付けられたポータブルトイレ

フィールドワークから学ぶ介助をめぐる人びとの営み―施設の環境を活用した介助の工夫

メアリーは，施設におむつの在庫がなく，雨季で洗濯物が乾かないために排泄介助に苦労している状態は，持続可能な介助ではないとの危機感をもっていた．そこで彼女は，当時の施設の環境を利用して脳性麻痺児の排泄介助を改善することに努めた．まず，大工が施設で作業をしていたということから，無料でいすを修理することと大工道具の調達を可能とした．そして，施設には多様な背景をもつ障害者が共同生活していることから，メアリーが施設で生活する成人の障害者に作業を委託することで，ポータブルトイレの改良を実現した．

このように，ポータブルトイレを製作し，脳性麻痺児の反応を観察しながら改良していった一連の流れは，メアリーによる日頃の脳性麻痺児に対する介助経験からうまれた介助の工夫である．これは，メアリーが介助を受ける脳性麻痺児の反応をよくとらえ，それに即して努力した結果で，両者の協働関係によってできた介助の改善の実践である．本稿で示したような介助の工夫の事例は，フィールドワークからこそ学ぶことができる介助に関わる人びとの営みであるといえる．

引　用　文　献

桑野タイ子．1988．「障害児のトイレット・トレーニング」丸川和子編『看護 MOOK 28―排泄と看護』107–113．

Singogo, C., M. Mweshi and A. Rhoda. 2015. Challenges Experienced by Mothers Caring for Children with Cerebral Palsy in Zambia, *The South African Journal of Physiotherapy* 71(1): 274.

山川友康・新井睦美・馬場先俊仁・森　知子．1993．「脳性麻痺児の排便指導」『理学療法ジャーナル』27(12): 815–821．

イノシシが未来の森をたべる

―防火のための植林活動を事例として―

亀　岡　大　真*

私は 2018 年 5 月から約 1 年間インドネシア共和国リアウ州の村に滞在し，火災の研究を行なってきた．主には火災や土地利用の衛星解析，村や行政での聞き取り調査を通じて火災に関わる人間活動や自然環境要因を明らかにしようと取り組んでいる．その一方で，

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

村で取り組まれている防火活動のひとつである植林のモニタリングに焦点を当てたことをきっかけにして，予想していなかったものの脅威に気づかされた．

火災被害

炎天下の中，村での調査中，帽子を取って汗をぬぐう際に，ふと上空を見上げると，ぼやけたオレンジ色の太陽が目に入った．晴天の日中にもかかわらず，不思議なことに，この太陽を見続けてもまぶしさを感じない．私の横にいた現地の調査パートナーが「ああ，また東（風上）側で火災が起きてるな」と呟いたのを耳にし，彼に理由を尋ねることで，この現象が泥炭地で発生した火災が放出する「ヘイズ（煙害）」によって引き起こされたものであるということが分かった．

調査地のリアウ州は大きく分けて乾季と雨季の 2 つの季節があり，特に乾季においては何日も雨が降らない日が続くことが珍しくなく，その際に土地が乾燥し，火が燃え広がりやすい環境となる．しかし，天気だけが火災のリスクを上げているわけではなく，人間による土地利用も多大な影響を与えている．1960 年代からスハルト政権における開発が実施される中，リアウ州では 1970 年代後半には道路の整備が進み，本格的な開発が進んだ［増田ほか 2012］．しかし，リアウ州の約 3,980,318 ha（リアウ州の面積の約 46%）が土地の開拓が難しい湿地環境である泥炭地であったため［Warren *et al.* 2017］，巨大な排水路（写真 1）を作り，泥炭地の乾燥化が実施された．それによって，泥炭地で

写真 1　横幅 10 m の巨大な排水路

起きる「泥炭火災」が頻発する環境条件を形成し，リアウ州では 2014 年の 2，3 月で約 143,000 ha の泥炭火災が起こった［The World Bank 2014］．加えて，未分解の有機物で形成された泥炭地という特殊な土壌で起きる火災は，①二酸化炭素の膨大な排出，②ヘイズによる健康被害の懸念，③農作物や交通網障害による経済被害をもたらし，国を超えた問題にまで発展し得る．そのため，国内外のさまざまな団体や組織が解決のために火災防止に取り組んでいる．

防火に関わる植林活動

そのプロジェクトのひとつとして，焼け跡地の「植林プロジェクト」が各地で行なわれている．植林活動は，（A）焼け跡地の植生の回復（自然環境保全），（B）林内への日射量の減少と防風による土壌の乾燥化防止，それに伴う火災リスクの低減（防災），（C）成木の販売を通した土地所有者の収入源確保（生計活動の向上）など幅広い役割が期待されている．

私が滞在していた村は 2014 年 2 月に発生

した火災により約 4,500 ha にも及ぶ面積が焼失し，地域住民の生活を脅かす深刻な問題が発生した．しかし，一部の焼け跡地で住民が下刈り，植栽を行ない，荒れ地を森林に回復させる活動が実施されている．

私は前職で林業関係の仕事に就いており，植林に関して村人と議論をして，盛り上がった．彼らの多くは農林業を生業としていることから，ひとりひとりが植栽を成功させるための考えをもっており，話していて非常に面白かった．その彼らの話をまとめると，植栽を成功させるポイントは，(a) 競合種の排除，(b) 豊富な水環境，(c) 苗の選択の 3 つが主に挙がっていた．競合種の排除は，定期的な下草刈りをすることで植栽する苗と競合する種がいないようにすること，豊富な水環境は，植栽地の土壌水分量が十分であり，かつ植栽してからも降雨によって水が供給される時期に植えること，苗の選択は，苗の樹種やサイズが植栽する土地に適していることを指し，特に樹種については村人それぞれで異なる意見があった．また，これらのコツは苗の枯死を防ぐために必要な条件を提供することであることが分かった．ただ，苗の樹種やサイズに関しては意見が一致していなかったので，これらの要因と生存率の関連性を明確にすることは，今後の植栽に必要であると考え，植栽後のモニタリングを試験的に行なうことに決めた．

写真 2　植栽された苗（写真中央）

予期せぬ植栽の結果

モニタリングを開始する前に，最近の植栽の現状を把握したいと考え，仲の良い村人に依頼して，10 日前に植栽した苗 48 本の現状を見せてもらえることになった．植栽は雨季である 10 月下旬に実施しており，植栽後も定期的な降雨があったことから，「乾燥による枯死はほとんどなく，多くの苗が生存しているだろう」と私は予想していたが，これは半分正解で半分不正解の結果であると後に知ることとなった．

現地調査をした結果，枯れた苗は 1 本だけであったが，14 本（約 3 分の 1）が行方不明になっていた．枯れたのであれば，その場に枯れたままで苗が残っているはずだが，不可解なことに多くの苗が完全に消えてしまっていた．原因を探るために付近で調査をしていると根っこまで引き抜かれた数本の苗を発見した．

イノシシの脅威

苗の状況や住民への聞き取り調査から，今回の原因がイノシシの食害であることが判明した．彼らは苗を引き抜き，その木の根っこを食べるため，このように苗が消失してしまう．また，住民曰く，「調査地付近はイノシ

写真 3　植栽地を歩くイノシシ

シの好物とされるパイナップル畑が広がっているため，特に数多く生息している場所である」ということであった（写真 3）．実際に私も現場近くで何度かイノシシを目撃していた．そのような環境であれば，多くの若者がいる村なので，狩猟が活発に行なわれていそうであるが，この村ではイスラム教が人口の大多数を占めており，宗教上の理由から不浄とされるイノシシを食べることがないため，イノシシの狩猟がほとんど実施されていなかった．最終的に，植栽から約 1ヵ月後には 3 本が枯死，27 本がイノシシの食害で消失し，彼らが与える影響の大きさを見せつけられた．日本ではシカの食害によって植林地が丸裸にされることがあるが，この地域ではイノシシによって森づくりに必要な苗が脅威にさらされているようであった．

森づくりに成功した小学校教師の思い

獣害対策はコストや労力，そしてそれらによって得られる利益を勘案すると非常に難しい問題である．つまり，対策に投資をしてもそれに見合う対価が得られるとは限らないからである．「このような状況で植林を成功させることは不可能ではないだろうか」と消極的なことが頭に浮かんでしまったが，ある人の存在のおかげで消えていった．その方は，村で一足早く植林活動を始めた地元の小学校の先生で，自分の土地約 2 ha をすでに森林（写真 4）に変えた人である．

彼は，「イノシシだけでなくたくさんの要因で苗を成木に成長させることは容易ではない．しかし，あきらめずに定期的な手入れを行なえばきっと森林が作られる」ということを熱気交じりに力強く話してくれた．しかし，この話を聞いた時に，「なぜそのようなさまざまな課題に直面しながら成功するかどうかも分からないものに打ち込むことができたのか」という疑問がふいに私の口から出てしまった．

今，振り返ってみれば，この疑問は当時の私自身の研究に対する考えだったのかもしれない．渡航前は火災問題の解決策を見つけると息巻いてきたものの，現場に来て，いざ研究をしていくうちに，予期していなかった多くの壁にぶつかり「自分がしていることが正しいのか，それ自体に意味があるのか」と

写真 4　泥炭地に広がる森林

迷っている時期であった．

そんな私の質問後に，彼は一呼吸おいて話し始めた．「昔はこの地域にも豊かな森が広がっていたが，今は火災や農地利用によって，森林がなくなってしまっている．私は子どもたちに森がどういうものなのかを見せたいと思い，植林を始めた．確かに，苦労は多かったが，続けることができた．それは今だけのことを考えず，未来に何を残したいかを考えていたからだ．自分の今の仕事が，将来の子どもたちに豊かな森を残せると考えれば，辛くともやり遂げることができた．」それを聞いて，胸の奥が熱くなったと同時に，問題に向き合うために重要な答えをひとつ得られた気がした．

1年間の現地滞在を終えて振り返ると，現地滞在型の地域研究は，研究に必要なデータ取りや学術的・社会的に価値のある結果を得ることだけでなく，研究を通じて出会う人たちの考えや思いに触れられることも魅力のひとつではないかと感じている．現在でもインドネシアと日本を行き来して，調査を続けているが，少しでも火災問題に寄与する研究にできるよう，彼のように思いをもって，日々できることを今後も積み重ねていきたい．

引　用　文　献

増田和也・水野広祐・杉原　薫．2012．「第5章　泥炭地域の社会経済史　交易から土地開発，そして保全へ」川井秀一・水野広祐・藤田素子編『熱帯バイオマス社会の再生―インドネシアの泥炭湿地から』京都大学学術出版会，129–165．

The World Bank. 2014. *Indonesia Economic Quarterly: Hard Choices*. Jakarta: The World Bank.

Warren, M., K. Hergoualc'h, J. B. Kauffman, D. Murdiyarso and R. Kolka. 2017. An Appraisal of Indonesia's Immense Peat Carbon Stock Using National Peatland Maps: Uncertainties and Potential Losses from Conversion, *Carbon Balance and Management* 12: 1–12.

世界に広がるハラール産業とその多様性

―マレーシア，ドバイ，トルコのフィールドワークから―

桐　原　　翠*

近年，イスラーム世界の内外で「ハラール」や「ハラル」という言葉が大きな注目を集めている．日本国内でも訪日ムスリム観光客の増加を背景に，イスラームに関わるこの言葉を耳にする機会が多くなってきている．

ハラールとはイスラーム法用語のひとつで

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

あり，「合法」などを意味する．イスラームでは，豚やアルコールの摂取を禁じているが，こうした禁じられたモノが入っていない製品のことをハラール製品と呼ぶ．近年では成分まで厳密に検査し，ハラールな食品や製品に認証を付与する制度が東南アジアのマレーシアを中心に発達してきており，こうした認証制度の整備を一因としてハラール産業は急成長を遂げ世界各国の企業が参入し始めている．

本稿では，こうした企業が多数集結し，自社のハラール製品の重要なマーケティングの場になっているハラール・エキスポに注目し，そこからうかがうことのできるハラール産業の最新動向を追いかけてみたい．

ハラール産業のはじまり

ハラール産業のはじまりは，1970 年代のマレーシアにある．1974 年に初のハラール証明文書が付与された．その後，欧米型ではなくイスラーム独自の経済発展を追求した第 4 代首相マハティール（1981–2003）の強力なイニシアティブの下でハラール産業は大きく成長した．1982 年には，包括的なハラール規格の策定に関する検討委員会が設置され，1994 年にハラール認証制度が導入された．21 世紀に入ると，マレーシアはハラール産業を国家の発展のための戦略産業に位置づけ，海外の市場にも積極的に進出していった．世界的なイスラーム復興の流れとイスラーム世界の経済発展によって，ハラール産業の市場規模は急拡大し，イスラーム世界の内外の企業が相次いで参入している．

ハラール・エキスポの増加

近年，世界各地でハラール・エキスポやそれに類したものが相次いで開催されている．これらには，ハラール製品を取り扱う企業が出展し，自社製品のマーケティングと，ハラール産業に関する情報交換の重要な場となっている．また，各国政府も積極的に関わり，ハラールを活用した産業振興のアピールの場にもなっている．

ハラール・エキスポ―マレーシアの場合

マレーシアは，ハラール産業の制度化の先駆的役割を担ったことや政策の一環としてハラール産業に力を入れていることからも，ハラール産業の動向を探るうえで重要な国である．

単に，ハラールな商品を取り扱う企業が多いというわけではなく，取り扱う分野が幅広いことやハラール認証に対する制度内容が細かく規定されていることなどから，どのような問題にも対処できるようになっている．多種多様な企業が参加する見本市からも，そのことは明らかである．

マレーシアの首都クアラルンプールでは，1 年に 1 度マレーシア国際ハラールショーケース（Malaysia International Halal Showcase，以下 MIHAS と略）を開催している．これは，2004 年から開催されており，2019 年の 4 月で 16 回目を迎えている．ハラールに関する製品を世界中に広めたいという目的から 2004 年当時，首相であったアブドゥッラーにより開催が宣言されている．

MIHAS には，世界各地からハラールに参

写真 1　2019 年 4 月 3 日–4 月 6 日に開催された MIHAS のパンフレット

写真 2　マレーシアにおけるファストフード大手の QSR ブランドのブース

入した企業が集まり，約 700 社が出展している．2019 年は，マレーシアの企業の他にインドネシア，タイ，シンガポール，日本，カンボジア，中国，香港，韓国，インド，パレスチナ，サウディアラビア，アラブ首長国連邦，アメリカなどが参加していた．

「なぜ，マレーシアの MIHAS に出展を希望したのか」といった問いかけには「マレーシアがハラール認証で有名であるため」や「取引を行なう際に英語でのやり取りが可能なため」といった回答が見受けられた．

マレーシアのハラール産業では，ハラールな製品や商品の開発だけでなく，パッケージの印象や売り方など工夫がみられた．また，マレーシアは KFC，スターバックスなどの海外の企業誘致も積極的に行なっており，このような企業の出展協力も MIHAS を盛り上げるために欠かせない存在となっていることが，ブースの賑わい具合からも明らかであった．

これまで，マレーシアで出展を行なっている企業は，ハラール認証を取得していることの主張が何よりも重要であり，パッケージや販売の仕方などは二の次のようだった．しかし，近年では「ハラール産業＝マレーシア」といった構図が定着しており，売り方やパッケージなどにも工夫を凝らすようになってきたと考えられる．

ハラール・エキスポードバイの場合

中東地域に位置する，アラブ首長国連邦のアブダビやドバイなどは，産油国として有名である．特に，ドバイは近代的な建物が多く，近代化している印象を受ける．中東地域は，ハラール事業に参入する必要のない地域といっても過言ではない．なぜならドバイ首長国内において，非イスラームなモノとの接触確率は極めて低いためである．ブタを具体的な例として示すと，アラブ首長国連邦内に養豚場などは存在しない．そのため，国内で製造されたモノに対し，非イスラームなモノ

の混入を恐れる理由がない．しかし，現在では，ハラール・エキスポの開催にまで至っている．そのため，ドバイの現状を把握することは重要である．

2018 年 10 月 27 日，28 日に，ドバイのデイラ地区において，ハラール・エキスポが開催された．会場は，ホテルの大会議室 1 室に収まるほどであり，マレーシアの MIHAS に比べると小規模であった．

参加企業は約 28 社程度であり，参加国の半数以上がマレーシアといった状況であった．エキスポからは，ドバイが，ハラール産業に力を入れているように見受けられなかった．その一方で，同日に別会場では Gulfood というフードフェスティバルが開催されていた．こちらは，イタリア，フランス，イギリス，トルコ，ヨルダン，サウディアラビア，中国，日本等が参加していた．また，数は少ないが，ハラール食品を扱う企業もあった．

ここから，ドバイではハラールを産業として捉えていないことが推察される．ハラールのみに限定したエキスポへの出展者や来場者は少ないが，ハラールと限定していないフードフェスティバルは人気であった．すなわち，ドバイで生産されたモノは必然的にハラールであり，ハラールな製品と限定する必要性が感じられない．ドバイ国内のハラール認証などのシステムの発達は，輸入する製品がハラールか否かを見極めることが最重要であることが考えられる．そのため，国内で発達途上であるハラール産業の仕組みは，アラブ首長国連邦が受け入れる製品や商品の判断に重きが置かれていることがわかった．

写真 3　Dubai Halal Expo 2018 の会場入り口

ハラール・エキスポ―トルコの場合

トルコは，アジアとヨーロッパにまたがる地域的特性がある．国民のほとんどがムスリムということからも，ハラール産業の必要性をもたないドバイと類似した国であるといえる．そして，近年，トルコ国内においてもハラール・エキスポが開催されている．

トルコ最大の都市とされるイスタンブルで，2018 年 11 月 29 日–12 月 2 日の 4 日間，ハラール・エキスポが開催された．トルコのハラール・エキスポは，2018 年で 6 回目の開催となった．トルコの地域的な特性を証するように，マレーシアの MIHAS では見ることの無かったヨーロッパやアジアの諸国からの出展もあった．また，イスラーム協力機構（Organisation of Islamic Cooperation，以下 OIC と略）がエキスポを開催していることも大きな特徴である．OIC は，イスラーム諸国をメンバーとして構成している国際機構のひとつである．

エキスポの参加企業は，約 150 社程度であり，主な参加国はトルコが多いが，その他

に韓国，中国，サウディアラビア，アフガニスタン，マレーシア，タイ，アメリカなどであった．地域的特性が活かされていると思われるのは，西アジアのアフガニスタンからの出展である．また，OIC の本部が置かれるサウディアラビアからの出展が目立った．

東アジア圏においては，日本からの出展は残念なことに無かったが，韓国のブースでは抹茶の試飲が大人気であった．この韓国のブースにおいて，試飲する人々に聞き取りを行なうと，東南アジアのマレーシアにおいて消費者が気にしているハラールへの姿勢とは異なった様子が見受けられた．抹茶の試飲を行なう人々は，口々に，「これを飲むと健康になれるんだよね？」といった問いかけや「これを飲むと痩せるのか？」といった問いかけがあった．執筆者の「なぜそのようなことを思うのか？」といった質問には，「ハラール食品だから」や「お茶は健康にいいと聞いたから」という回答があった．

ハラール産業が拡大していく中で，ハラールに対するイメージやハラールが担保する内容が拡大してきたことが，トルコのエキスポのフィールド調査から明らかとなった．

食の重要性とイスラームの知

マレーシアから始まったハラール産業は，今や世界中に波及している．波及する過程

写真 4　サウディアラビアのブースにて，試食のデーツを振る舞っている様子

で，各国の地域性を含んでいる．マレーシアは，国内で製造される製品や食品がハラールか否かを注視しており，輸入品もその対象となっている．一方，ドバイにおいては，国内で生産するものはハラールである絶対的な安心感を有しているが，輸入の製品に対しては，厳格なチェックを求めている状態である．トルコにおいては，ムスリムのためのハラール食品というより，ヨーロッパ圏にも通用するハラール製品や食品を提供していこうとしていることが考えられる．

地域の事情をも伴う，ハラール産業の展開は，今やムスリムの安全性を担保すること以上に，非ムスリムの健康や安全性といった課題にまでも拡がりをみせている．今後のハラール産業がどのように展開していくのか楽しみである．